産経新聞夕刊「感・彩・人コラム」
2008年5月12日

地野菜の復活

大阪ｶﾞｽ ｴﾈﾙｷﾞｰ・文化研究所
客員研究員　弘本由香里

４月下旬、大阪都心部の自宅マンションで、猫の額ほどの小さなバルコニーにプランターを並べ、玉造黒門越瓜（たまつくりくろもんしろうり）の種を蒔いた。貴重な種を提供してくださったのは、玉造黒門越瓜の復活に力を注がれている、玉造稲荷神社さん。

越瓜は古代中国の越（えつ）の国が原産地で、江戸時代には大阪城玉造門（通称黒門）界隈で盛んに栽培されたという。とりわけ粕漬けは、大阪名物として人気を集めたらしい。

けれど、明治以降、都市化が進み、食品の流通も激変。玉造界隈でも畑が次々と姿を消し、越瓜もまた、近代化の波に飲み込まれていった。その後１００年以上の時を経て、かつての産地・玉造に戻ってきたのである。

今、玉造稲荷神社の瓜畑ではすくすくと越瓜が育ち、毎年７月１５日には「玉造黒門しろうり食味祭」が開催される。地域の有志による玉造黒門越瓜出隊が媒介役になって、学校や家庭での栽培、食のイベントへの参加、お料理やお菓子の創作など、関わる人の輪も年々広がっている。

味詰ら活小
やが暮復。
形化た文しが、
姿文差いが
のと差いて
菜史根願れる。
野歴にのら
地の域へめ
るち地り込
れまづくに
ふ、ま中に
あはいる。地
性にてまちの
個いっや物語
わましのさな種

を手に思う。■